

めあて意識をしっかりと持ち、 夢中になって仲間とともに運動に親しむ姿を求めて ～跳び箱運動（6年生）の実践を通して～

上野 佳彦

跳び箱運動は、できる跳び越し方でいろいろな高さに挑戦（克服型）したり、できそうな跳び越し方に挑戦（達成型）したりする楽しみ方がある。子ども一人ひとりが、この運動に魅力を感じ、自分のめあてに向かって意欲的に取り組む姿を求めて授業づくりを考えた。

キーワード： 仲間、視覚的、共有物

1. めあて意識を持たせ、理由や根拠のある 三位一体の対話をつくる

学習の中で、自己を更新し、学びの質を高めていくためには、めあて意識をしっかりと持たせ続けていくこと大切である。

めあて意識とは、本単元で扱う跳び箱運動であれば、できない跳び越し方に挑戦するとき（克服型）であれば、「しっかりと踏み切って、後頭部を跳び箱につけるように台上前転をがんばる。」や、できる跳び越し方でより高く跳び越す（達成）であれば、「踏みきりの位置を考えて、高く跳ぶことに挑戦する。」など、技に対する理由や根拠をより具体的に持つことだと考えている。

また、対象に対する具体的な理由や根拠を持つことは、自己が他者とのかかわりの必要性を生み出す。そして、かかわりの中から新たな理由や根拠が生み出され、学びの質を高めていくことができる。

本単元では、視覚的な手だてを中心に次のような研究を行った。

1. 1. 視覚的機器の活用

①跳び越し方をDVDで紹介する。

オリエンテーションでめあてとなる跳び越し方のイメージをしっかりと持たせるために、DVDで跳び越し方を提示した。また、自分でいつでも見ることができるようDVDを児童に配布した。

②動画機能や連写写真で自分のできばえを認識する。

体育館にデジタルカメラを配置し自由に使える環境を作った。自分がどの程度できているのかを映像を通して確認することで、「もう少しできそうだ。」という達成感を味わうことができたり、新たな解決策を見つれたりすることができる。また、子どもたちのかかわりの中で、運動している側とアドバイスしている側お互いのイメージにずれがあり、話し合いが続か

い場合がよくある。映像という共有物とおしてかかわることで、具体的な話し合いができ、学びの質を高めることができると考えている。

また、この写真を使って一斉学習の場での技術指導にも活用する。

1. 2. 場の設定

めあて1の場は、6台の跳び箱を2方向から跳ぶことができるように設定をし、生活班で準備させるようにした。

めあて2では、同じ跳び越し方の子どもで話し合い、技カードに提示した練習の場の例から自分たちに合ったものを選択したり、それを参考にして子どもたちが考えた場を作ることができるようにした。そして、技カードに示した練習の場は、安心して跳び箱運動を楽しめるようにオレンジボックスやセーフティマットなどを使い安全な場で練習ができるように配慮した。場所や教具の数に制限があるため、授業前に、同じ技に挑戦するグループの子を集めて場を決めさせた。配置は、教師で行った。

1. 3. グループ設定

一人ひとりのめあてを大切に個人種目では、個人の思いが尊重されにくいいため、グループを作って学

練習の場の例

★かかえこみ跳び

- ・舞台に跳び上がる場
- ・2台（3段 5段）の跳び箱をつなげた場
- ・跳び箱2台とゴムを使った場
- ・2台跳び箱の間に、段ボールを積んだ場

★台上前転

- ・ロールマットの場
- ・オレンジボックス
- ・跳び箱にマットをかぶせた場

★頭はね跳び

- ・セーフティマット
- ・オレンジボックス
- ・ロールマット

などを絵で説明したものを配布

習することは望ましくないと考えている。しかし、学びの質の高まりは、仲間（他者）からのアドバイス・励まし合い・賞賛・協力などのかかわりから生まれてくるものである。仲間意識がもてるように次のようなグループを形成することにした。

○めあて1

場の準備と準備体操は、生活班で協力して行う

・・・固定グループ

活動は、同じ場にいる人たちで行う。

・・・流動的グループ

○めあて2

場作り・活動は、跳び越し方別にグループで行う。

・・・固定グループ

とし、めあて2でのかかわりを特に意識させたいと考えた。そして、「台上前転は緑」、「ヘッドスプリングは黒」というように、それぞれのグループに同じ色のビブスを着せることで、毎時間変わるグループでも仲間意識を持てるようにした。子どもたちは、人間関係を重視する傾向にあるが、運動の魅力に触れ、自分の挑戦したい跳び越し方でグループを選択してほしいと願っている。

1. 4. 学習内容の共有化

それぞれの場で子どもたちが学習したことをクラスで共有することは、個人への学びの質への高まりにもつながる。そこで、学習カードやまとめの時間での気づきを掲示物に書き込み、子どもに知らせるようにする。跳び越し方の技術的な共有や「踏みきり」「助走」など跳び箱に関する言葉の共有をすることで子ども同士のかかわりをより円滑に行うことができると考えている。また、「□□さんは、跳び箱の用意をしてくれない。」「○○君が、頭はね跳びの頭のつきかたを教えてください。」「△△さんがマットを運ぶのを手伝ってくれた。」などのルールやマナーについても取り上げ共有し、楽しい授業づくりをしていきたい。



2. 研究の検証方法

①学習カード

②撮影した写真

③参観者の声

から技能の高まりやルール、マナーを守って楽しめているかを検証する。

3. 授業の実際

(1) 単元名 跳び箱運動

(2) 運動の特性

①運動の特性

○一般的特性

いろいろな高さや向きの跳び箱を跳び越したり、いろいろな技で跳び箱を跳び越したりするのが楽しい運動である。

○子どもから見た特性

- ・高さに挑戦することが楽しい。
- ・高い跳び箱を跳べるとうれしい。
- ・新しい技に挑戦することが楽しい。
- ・新しい技で跳び越せるとうれしい。
- ・友達にアドバイスをもらったり、ほめられたりするとうれしい。

②子どもの実態

[運動に対する欲求や関心]

- ・新しい技に興味を持って取り組もうとする子どもが多い。
- ・新しい技に挑戦するよりも、高さに挑戦したいと思う子どもが多い。
- ・跳び箱を跳び越すときのふわっとした感じを心地よいと感じる子どもがいる。
- ・跳び箱に対して恐怖心を持っている子どもがいる。
- ・マット運動では、めあてで場を選ばず友達で場を選んでいく子どもがいた。
- ・「失敗したら何か言われそう。」と不安を感じている子どもがいる。
- ・単元の初めに、自分の手に負えるか不安に感じる子どもがいる。
- ・事前アンケートでは、跳び箱運動が「好き」と答えた子どもが13人(35%)、「ふつう」と答えた子どもが22人(57%)、嫌いだと答えた子どもが3人(8%)であった。「ふつう」と答えた子どもの理由には、「高い段が跳べない」「あたったら痛い」など、好きになれない理由を書く子どもがほとんどであった。

[技能的な個人差]

- ・開脚とびができない子どもが2人いる。
- ・ダンス教室やバレエ教室に通っている子どもが数人おり、体がとてもやわらかい。

[学習の経験]

- ・全員が、開脚跳び以外の技をやったことも聞いたこともない。
- ・学習の進め方(スパイラル型の学習)は、マット運動で経験した。単元が進むにつれてめあてを意識して活動ができるようになった。

[子ども同士のかかわり]

- ・友だちに励まされたり、ほめられたりするとうれしい。

- ・女の子は、特に仲のいい子と一緒に活動する傾向がある。
- ・異性に見られることに、恥ずかしいと感じている子どもがいる。
- ・自分の技に取り組むことで精一杯になり、友達にアドバイスする余裕がない。
- ・みんなで教え合いをしながら楽しい学習にしたいと思っている子が多い。

	1	2	3	4	5	⑥	7	8	
0分	はじめ	ねらい①							
45分		ねらい②						まとめ	

(3) 学習のねらいと道筋

①学習のねらい

いろいろな高さや向きの跳び箱を跳び越したり、いろいろな技に挑戦したりして楽しむ。

ねらい1 今持っている力で、いろいろな高さや向きの跳び箱を跳び越して楽しむ。

ねらい2 できそうな技に挑戦して楽しむ。

②学習計画 (全8時間)

③評価計画

運動技能	運動への態度	運動についての思考判断
①できる跳び越し方で、ちがう高さや向きの跳び箱を跳び越すことができる。 ②自分のできそうな跳び越し方を選択し、それらの技に取り組んでできる。	①仲間と運動をして楽しもうとしている。 ②ルール・マナーを守る。 ③仲間と協力して仲良く活動できる。 ④安全に気を付けて活動する。	①跳び箱運動の仕方がわかり、楽しめる場を選択している。 ②跳び箱の跳び越し方を考え行っている。

④単元計画

★オリエンテーション (20分)

1. 学習のねらいと筋道を知る。
2. 学習の進め方を知る。
3. 映像や学習カードから跳び越し方の種類や工夫した場を知り、学習の見通しを持つ。

【めあてとなる跳び越し方】

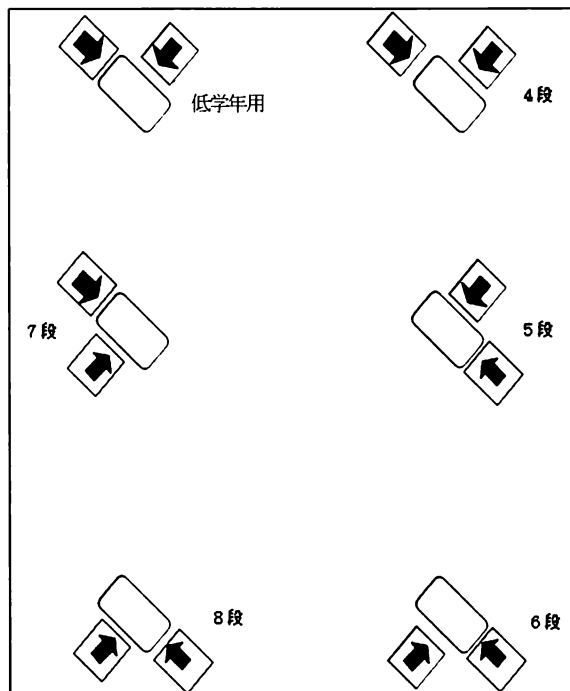
開脚跳び 台上前転 かかえこみ跳び ヘッドスプリング 横跳び越し
側方倒立回転跳び 前方倒立回転跳び あおむけ跳び

4. マナーについて話し合う。
5. 学習の場の用意の仕方を知る。

★ねらい1→ねらい2 (25分+45分×5+35分)

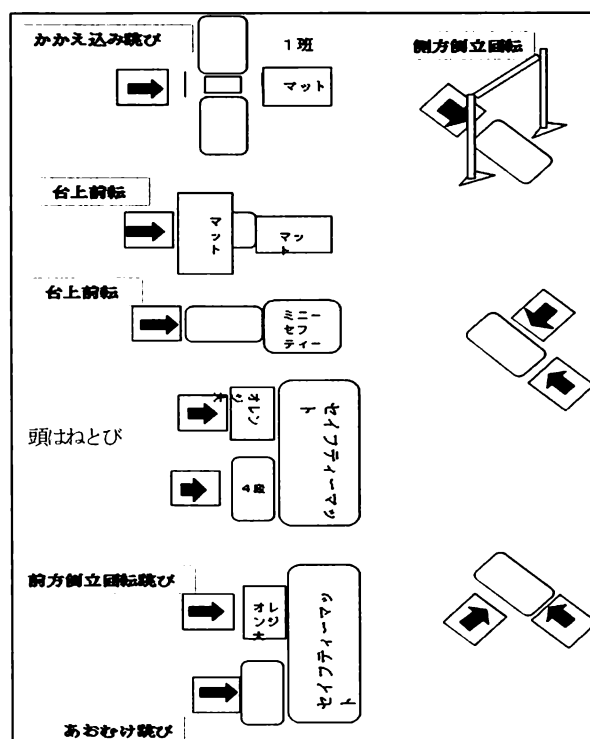
ねらい1

今持っている力で、いろいろな高さや向きの跳び箱を跳び越して楽しむ。



ねらい2

できそうな跳び越し方に挑戦して楽しむ。



★まとめ (10分)

・跳び箱運動で楽しかったこと。がんばったことを振り返る。

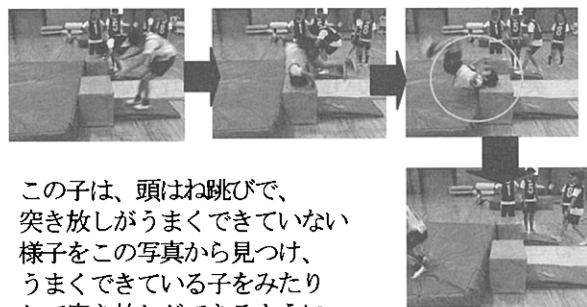
4. 考察

4. 1. 視覚的機器の活用

つまずいた時に、跳び越し方を DVD で確認したり、デジタルカメラの動画機能や連写写真で自分の運動の様子を確認したり、上手な子の運動の様子を比較したりして活用することができていた。

また、一人で映像を見る子よりも複数で見て話し合っている姿が見られた。特に連写写真は、跳び越し方の違いが分かりやすく、手の着き方や頭の着き方など細かな違いを見つけられていた。

〔連写写真から気づき 例〕



この子は、頭はね跳びで、突き放しがうまくできていない様子をこの写真から見つけ、うまくできている子をみたりして突き放しができるようになった。

4. 2. 場の設定

特に、めあて2では、子どもたちは、安心して練習に取り組むことができていたが、子どものつまづきを練習する場になっていなかった子どもがいた。例えば、頭はね跳びでの手を突き放して背中をそらせて着地する練習は、落差があって着地しやすい舞台での場で練習させるべきであったように思う。自主性と指導性の調整がうまくできていなかったように思う。

4. 3. グループ設定

固定グループでの場の準備は、協力してスムーズに行うことができていた。流動的な高さ別や跳び越し方別のグループでは、デジタルカメラなどを媒介に、まとまって話し合いができていたが、反面、話し合いの輪に入れない子がいた。グループで反省する機会などを持ち意図的にかかわらせる必要があったように思う。

4. 4. 学習内容の共有化

振り返りを重ねるにつれて、跳び箱運動の経験が少ない子どもたちが、「手の着き」「踏切り」など跳び箱運動に関する言葉を使って話し始めた。また、跳び越し方についても、仲間から知っていた情報を元に試してみる姿が見られた。

また、「走路を横切っていく人がいて危ない」「順番を守らない人がいる」など、ルールやマナーについても共有化できた。

5. 成果と課題

5. 1. 指導性と自主性

子どもたちの意欲を大切に授業づくりを行ってきた。跳び箱運動は、好きではないと言っていた子も毎時間、体育の授業を楽しめていたように思う。仲間と話し合いめあて達成に向けて努力しているのだがやはり難しい子がいたように感じた。

教師は、つまずきの原因を見極め、的確な間接的(場の変更を促す)、直接指導(助言、補助)をする必要があると感じた。そのためには、運動の構造的な理解を教師が深め、練習の場の開発や子どもにも響く言葉がけを研究していかなければならない。

5. 2. 視覚的機器の有効活用

視覚的機器は、画像を見ながら話し合いができるため、話し合う視点が明確であり、自分の運動を認識することや話し合いの共有物として効果的であった。日頃の体育の時間はもちろんのこと他の授業でも視聴覚機器を子どもに使わせることで、素早く扱うことができ、撮影時間の短縮や効果的な撮影が期待できる。

参考文献

- 全国体育学習研究会 全体研ニュース NO.16 1983
文部科学省 小学校学習指導要領解説 体育編 2008
教育技術MOOK 跳び箱遊び・跳ぶ箱運動 小学館 1998
鈴木秀人 山本理人 杉山哲司
小学校の体育授業づくり入門 学文社 2009